慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イシュメイルの航海日程 : 『白鯨』に暦法を探る
Sub Title	Ishmael's itinerary : a calender followed in Moby-Dick
Author	山本, 晶(Yamamoto, Shoh)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.95- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イシュメイルの航海日程

――『白鯨』に暦法を探る

「暦だ、暦だ！　本暦を調べて、月夜を探せ」――シェイクスピア『真夏の夜の夢』

山本　晶

1　捕鯨航海の年
2　暦法を探る
3　出航準備期間
4　航跡を辿る
5　沈没時期の謎

1　捕鯨航海の年

『白鯨』の語り手イシュメイルは嚢中不如意となり、陸の上では何も面白いことがないので、船に乗って水の世界を見ようと考える。そうすることが、いつも憂鬱な気分をはらい血行をよくする手段だ（第1章）というのである。かくして、イシュメイルはニューヨーク市マンハッタンをあとにすると、捕鯨船に乗り組んでケイプ・ホーンへ、太平洋へ

とおもむくべく、まずはマサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードに向かう。現地に着いたのは「十二月のある土曜日の晩」（第2章）だという。では、その十二月とは西暦何年のことであろうか。その解は、他ならぬ語り手自身が、おのれの航海は大昔に神が定めたもうた壮大な予定表の一部であったとみなして、次のように、二つの大きな演目の間にはさまれた短い幕間狂言を、プログラムに印刷した形で示しているところ（第1章）に求められるであろう。

合衆国大統領職をめぐる大選挙戦

イシュメイルなる者の捕鯨航海

アフガニスタンの血みどろな戦闘

十九世紀にアフガニスタンで勃発した戦争といえば、二回ある。一八三八年から四二年までの第一次と、一八七九年から八一年までの第二次であるが、後者は『白鯨』刊行（一八五一）以後のことだから問題外である。第一次では終結年の一月六日、英軍がアクバル・ハーン率いるところのアフガン軍に圧倒されて、カブールから退却した。この際、英軍は三千人中、百二十一名を残して全員殺されたという。『白鯨』の語り手が「血みどろな戦闘」と呼ぶゆえんである。第一次は同年秋まで続く。

この戦闘と時期的に近い、アメリカ合衆国における熾烈な大統領選といえば、一八四〇年のそれを措いて他にない。第八代大統領マーク・ヴァン・ビューレン（民主党）と、「一八一二年の戦争およびインディアン討伐の英雄」ウィリアム・H・ハリスン（ホイッグ党）との間で争われ、後者が二三四票対六〇票の大差で圧勝したのだが、現職を打倒する激戦の労苦がたたったのか、ハリスンは在任わずか一か月で一八四一年四月四日に死去した。享年六十八。

従って、イシュメイルの捕鯨航海は、右のように一八四〇年と四二年におきた二つの歴史的事件の間のこととされているのだから、一八四一年のことと見るのが自然の推理となる。ただし、その妥当性を確信するには、もう少し厳密な検討が必要であろう。語り手によれば、ニュー・ベッドフォードからナンタケット島に渡り、そこからピークォド号に乗り組んで出航したのは「日の短い寒いクリスマス」（第22章）のことだったという。原文の「ア・ショート・コールド・クリスマス」は、すぐそのあとで「ザ・ショート・ノーザン・デイ」と限定されているから、イヴの十二月二十四日から翌年元日まで、あるいは英国で顕現日の一月六日までとされている「クリスマスタイド」のことではなくて、十二月二十五日の「クリスマス・デイ」であろう。しかも、それは前掲二つの歴史的事件にはさまれた一八四一年ではなくて、その前年の暮であるはずである。なぜならば、一八四一年では残りわずか六日で年が明け、すぐに例の血みどろな戦闘の時期にぶつかってしまう。語り手の航海の主要部分が一八四一年を占めるためには、「イシュメイルが出航したクリスマス・デイは一八四〇年暮である」（解1）としなければならない。

では、その年十二月の暦は、どういう日取りであったろうか。

2　暦法を探る

もちろん、当時の暦を披見することができれば、問題は一気に片づいてしまおう。だが、ここでは比較的簡単な方法により自分で暦を作ることにする。それにはジェイ・レイダの『メルヴィル・ログ』の中に、当のクリスマス・デイ前後で、曜日を伴う日付入りの記録はないか調べればよい。すると、アマゾン号の航海日誌として、一八四〇年十一月三日（火）、同四日（水）の記述、および翌年一月四日付ニュー・ベッドフォード・デイリー・マーキュリー紙の記事と

1840年12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

して、アクーシュネット号が前日の一月三日（日）に出航したとの報道がのっている。[1] 実は、後者こそ作者メルヴィルが出航した日の記録なのであるが、今はさて措き、右のように前後少なくとも二つの別個の記録をもとに暦を作り、互いに衝突しなければ精確であろうと推定して、まず間違いはあるまい。かくして、矛盾なく成立した一八四〇年十二月の暦は、上掲の通りである。

ことわっておかなければならないのは、ここでいう暦は新暦だということである。すなわち、一五八二年ローマ法王グレゴリオ十三世がユリウス暦を改めたもので、基本的には今もわれわれが使っているグレゴリオ暦のことである。[2] これはカトリックが作った暦であるから、プロテスタントの諸国は長い間受け容れようとしなかった。暦書『三正綜覧』によれば、英国は一七五二年に至ってようやく旧暦を新暦に改め、これ以降ヨーロッパで引続き旧暦を使用するのはロシア一国を残すのみとなった。[3] いや、精確に言うと、ギリシアや東欧諸国の正教圏も旧暦を使用し続けたのである。いずれにしても、米国版に先立って『白鯨』初版が英国で刊行された年はすでに新暦時代に入って百年、ここで新暦により考えることに全く問題はない。

念のために、『三正綜覧』によって上掲の暦を検証してみると、一八四一年一月一日は金曜日とある[4]から、木曜日で終わる前年十二月の上掲暦に誤りはないことが確認される。もちろん、初めから同書を用いて暦を作ることもできる。

次は、こうして作った暦により、イシュメイルのニュー・ベッドフォードおよびナンタケットにおける日日の推移が、具体的に何日の何曜日に当たるかを究明する番である。

3　出航準備期間

ここで再確認すると、語り手のニュー・ベッドフォード到着は「十二月のある土曜日の晩」であった。われわれの暦によれば、土曜日は五日、十二日、十九日、二十六日とある。このうち五日は物語の進行に照らして余りに早過ぎの感があり、二十六日はクリスマス・デイのあとになって具合がわるいから、このふつかは考慮の対象からはずしてよい。イシュメイルがピークォド号と乗船契約を結び、クィークェグの採用にも力を貸して成功するまでに、およそ五日が経過している。ちょっと厄介なのは、そのあと出航までに何日をみるかという問題である。クィークェグが採用された翌日、乗組員が泊まっている宿ごとに、もういつ何どき出航になるやも知れぬから、日の暮れぬうちに荷物を搬入せよとの触れがまわったので、急いで荷物だけは船に運んだが、出航まぎわまで泊まるのは陸の宿にした（第20章）という。このとき一両日が過ぎたと言っている。ところが、出発準備の通知はよほど早めに出すものとみえ、実際に船が出たのは数日後のことだったとも言っている。問題は原文で「セヴラル・デイズ」という日数が、一両日プラス数日なのか、一両日を含むのかということである。ちなみに、英語の辞書はふつう「セヴラル」を三以上、五くらいまでで多数ではない数と説明している。

そこで、まずニュー・ベッドフォード到着を出航の一週間ほど前の十九日（土）と仮定してみよう。すると、クィークェグ採用は五日目の二十三日（水）となり、出航日まで中一日しかないことになる。これでは、いかにも短い。なぜならば、チャリティおばさんと呼ばれる老婦人が船に足繁くかよって、いろいろな物を届けており（第20章）、厳密に考えて、これが必ずしも別別の日であるとは限らない[5]としても、これを含む積荷作業の期間中、語り手は相棒（クィー

クェグ）と共に船を連日おとずれては、エイハブ船長がいつ乗船するのかと、しばしば人にたずねている。そして、出航当日、船長が前夜に乗船したと耳にしているのである。ということは、船長乗船がクィークェグ採用と出航との間の一日であるから、そこにはもう積荷作業の日日や、船長乗船について繰り返し質問した日日が入る余地は全くなくなってしまう。してみると、最初の仮定が無理だったわけである。そこで、到着日を一週間繰り上げて十二日（土）だったと考え、第2章から第22章までに記述されている日日の推移を、以下のように割り振ってみよう。（かっこ内アラビア数字は章のノンブル）

一八四〇年十二月

12日（土）　夜、ニュー・ベッドフォードに到着　ナンタケット行きには月曜日まで待たねばならぬと判明　当地に二泊することになる（2）　スパウター・インに投宿（3）

13日（日）　クィークェグと同衾して朝を迎える（4）　朝食（5）　朝の散歩（6）　再び外出して礼拝堂でマプル牧師の説教を聴く（7・8・9）　相棒と親しみ二泊目の夜を過ごす（10・11・12）

14日（月）　月曜日の朝を迎える　渡し船でナンタケットに渡る（13・14）　トライ・ポッツに投宿（15）

15日（火）　朝、波止場にゆき乗船契約（16）　相棒の断食趺座に悩まされながら朝を迎える（17）

16日（水）　相棒の採用に力を貸す（18）　謎の人物イライジャに出会う（19）

17日（木）　相棒採用の翌日　荷物を搬入（20）

18日（金）　一両日経過（20）

19日（土）　いつ何どき出航するやも知れぬという話だったが、実際の船出は数日後だった（20）

20日（日）　出航まぎわまで泊るのは陸の宿にした（20）
21日（月）　しばらくは積荷作業が続く（20）
22日（火）　連日、相棒と共に船をおとずれ、エイハブ船長の乗船はいつかとたずねる（20）
23日（水）　チャリティおばさん、水夫たちの寝床に小型讃美歌集を配る（22）
24日（木）　翌日必ず出航の通知（20）　夜、エイハブ船長が乗船（21）
25日（金）　クリスマス（22）　早朝、イライジャに再会　乗船（21）　正午近く出航　月夜に沖合へ出る（22）

だいたいこのようになるが、どうだろうか。クィークェグ採用の翌日から、出航の前日まで八日間となり、今度は余裕がたっぷりできた。セヴラル・デイズは一両日を含まないと考えた方がよさそうである。

以上の立論により、「イシュメイルのニュー・ベッドフォード到着からナンタケット出航までの期間は、一八四〇年十二月十二日（土）から同二十五日（金）までの二週間である」（解2）と証明することができた。

ちなみに、作者メルヴィルは生地のニューヨーク市マンハッタンを離れて、一八四〇年十二月二十六日（土）、ニュー・ベッドフォードで「シーマンズ・プロテクション・ペイパー」という、外国ゆきの船員が携帯すべき国籍証明書の発給を受けている。[6] そして、おそらくは翌日の日曜日に礼拝堂でミサに参列して、イーノック・マッジという牧師の説教を聴いたのではないかと推測されている。[7] そのあとナンタケットに渡り、十二月三十一日（木）、アクーシュネット号の乗組員として登録を済ませた。[8] 今も残る書類により、その時メルヴィル二十一歳、身長五フィート九・五インチ（約一七六・五センチ）、肌の色はダーク、髪の毛はブラウンだったと分かる。出航したのは、前述のように、明くる年の一月三日（日）であった。[9] あるいはマッジ牧師の説教を聴いたのは出航日の日曜日だったという可能性もある。[10] な

ぜならば、イシュメイルと異なり、出航地は対岸のフェアヘイヴン港だったからである。けっきょく、メルヴィルの場合、現地到着から出航までの期間は、少なくとも（というのは現地到着日が不明だから）九日であった。これまた語り手の場合と異なるが、日曜日が二回あったところは似ている。時間や場所に限らず、実際的体験と文学的創作との間に各種の異同があるのは、何ら不思議でない。たとえば、メルヴィルの場合、中篇「ベニト・セレノ」（一八五五）を、その出典であるアマサ・デラノ船長の実録『航海記』（一八一七）と比較検討してみれば、実際と作品との異同を詳細に理解することができ、[11] 作家の創作の秘密に触れることができよう。『白鯨』は単にエイハブがモウビィ・ディックと輸贏を争う物語ではなく、テーマはキリスト教的な信と不信の問題であると解釈することができる作品[12]である。さればこそ、出航日を実際よりも繰り上げて、クリスマスの日に設定しているのが、いかにも象徴的で意義深く映るのである。

さて、あとはピークォド号の航海がどれくらい続いたかという疑問が残っている。それはとりもなおさず、同船が沈没したのはいつかという問題を解明することに他ならない。

4　航跡を辿る

アメリカ合衆国の東部海岸から出航した捕鯨船が、西太平洋の一定漁場をめざしてゆくのに、南米南端のケイプ・ホーン経由（西回り）にするか、アフリカ南端の喜望峰経由（東回り）にするかで、所要日数は異なるであろう。ただし、捕鯨船というものは航海の途中で捕鯨や寄港を繰り返すから、日数計算や比較がむずかしい。ちなみに、メルヴィルは一八四一年一月から四四年十月まで三年九か月ほど二回目の航海をしたが、往復ともケイプ・ホーン回りだったか

ら、喜望峰回りは経験していない。メルヴィルが乗り組んだアクーシュネット号は、出航して三か月余の一八四一年四月十五日にケイプ・ホーンに到着した。[13] あと三、四か月もあれば、太平洋のどこにでも達することができよう。

いずれにしても、初めて『白鯨』を読む者にとって、ピークォド号がどちら回りをとるかと疑念をはさむ余地は全くない――ように見える。なぜならば、前述のように、語り手自身が初めから「ケイプ・ホーンへ、太平洋へ」（第2章）行くと明言しているし、そのあと第51章に至るまでケイプ・ホーンの名は十五回も挙げられているからである。他方、喜望峰への言及は二回しかみられない。しかもケイプ・ホーンと併記されて、言わば一般論の形で目にするに過ぎないのである。ところが、第51章にもなって突然、船は大西洋上の四つの海域を経由したのち、喜望峰沖で嵐に遭遇したと知らされるから、文字通り晴天の霹靂となる。しかも、地球儀で確かめてみれば分かるが、喜望峰までに到るジグザグ振りが、また甚しい。いったんアゾレス諸島沖（N35度）からベルデ岬諸島沖（N15度）へ向かい、更に南米東南のラプラタ川河口沖（S35度）へ一気に南下したかと思うと、大転回してセント・ヘレナ島の南方（S20度）を経て喜望峰沖（S40度）に達するのであるから、南北大西洋を少なくとも三回は横断したことになる。船乗りの経験に富む作者が針路を迷うはずがない。とすれば、ケイプ・ホーン回りへのあれほどの言及のすえに、突如として船を大転進させて喜望峰沖に出現させたのは、月夜に鯨がここと思えばまたあちらと、銀色の汐ふきで人間を惑わす（第51章）、その神出鬼没振りの予兆を示すと同時に、テキスト操作による作者得意の読者はぐらかし、乃至たぶらかしの術策であったと読み取るべきではなかろうか。ちなみに、『白鯨』の「ノートン・クリティカル・エディション」所載の地図に描かれているピークォド号の航跡は、肝腎の大転回の過程がすっぽり抜けている。[14]

喜望峰から先、太平洋に到る道筋は明快である。いったんクロゼー諸島沖（S45度）へくだったあとは（第52章）、

北東へ針路を転じ、ジャヴァをめざして（第59章）、インド洋を渡り（第61章）、スマトラとジャヴァを分かつスンダ海峡を抜けて、ジャヴァ海に入る（第87章）。そこから北上し、フィリピン諸島の近海を回航してから、日本列島のはるか南方に当たる赤道付近で、大捕鯨シーズンに間に合わせよう、というのがエイハブの魂胆だという（第87章）。事実、船は台湾とバシー諸島の間を通り、日本付近に達して猛烈な颱風に襲われたあと（第111章）、南下して赤道に向かい、エイハブがかつて苦しい傷手を負うた緯度と経度に近づくと（第130章）、遂に白鯨発見となる（第133章）。あとはエピローグを除く最終章（第135章）まで、白鯨追躡の三日間を経て、エイハブのボートと本船はモウビィ・ディックに体当たりされ、洪水のような波浪を浴びて、海底に引きずり込まれるのである。もちろん、語り手を除いて、三十数名の乗組員全員が海の藻屑と消えたわけである。

作品から読み取れる位置は、「いちばん近いのは鎖国の日本」（第123章）と思われるところから南下した、赤道付近の海域ということである。それ以上具体的なことは何も明示されていないが、仮りにそれが北半球の範囲内であれば、おそらくカロリン諸島の一帯であろうと推測するにとどまる。すなわち、「白鯨は、ほぼ赤道から北緯10度までと、東経140度から160度までにわたる海域の、どこか一点で発見された」（解3）ということになろうか。

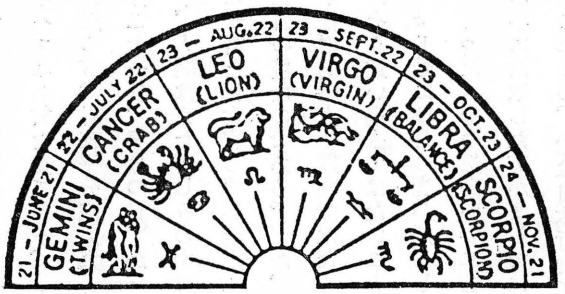
アインシュタインの理論によると、時間と空間とはつまるところ同じものだそうであるが、先に辿った航跡にみる各行程（レグ）について所要日数が明示されていれば、全行程の所要日数を積算することができ、かつはまた沈没時期を推定することにつながるはずである。だが、残念ながらごく一部を除いて知ることができない。あるいは、最終段階で白鯨発見までの所要日数が一度記述されているだけでも足りるのであるが、作品は「これほど長きにわたり追跡してきた」（第133章）と述べるのみである。

では、ピークォド号の沈没時期は永遠の謎なのであろうか。

5　沈没時期の謎

われわれはその謎を解く鍵が、他ならぬ「ダブロン金貨」の図柄にあると思うものである。従来「スペイン金貨」と訳されてきた「ダブルーン」は、スペインのみならずスペイン語圏の中南米諸国でも発行された昔の金貨である。『白鯨』第99章の章題となっているダブロン金貨は赤道直下にあるエクアドル共和国の発行になるもので、現実主義者の三等航海士フラスクが言うように、当時でも約十六ドルの価値があり、百五十年後のこんにち古銭趣味（ニューミズマティクス）の世界で約五千ドルの評価を有する、実在の貴重な金貨である。作品ではエイハブが白鯨の第一発見者に与えるとして、メイン・マストに打ちつけた一個のことである。さしあたり、われわれの目的のためには、そのデザインの上半分のみを注目すればよい。そこには黄道十二宮（いわゆるゾディアク）の半分に相当する、双子宮から天蝎宮までが印刻され、黄道帯の半ばに太陽が重なって印刻されている。太陽の図柄は、中南米でよく見られるように、周縁に放射状の光線をめぐらした、人間の丸顔になっている。黄道帯の半ばにあるはずの獅子宮と処女宮は、太陽に隠れて見えない。[15] こういう図案の金貨が打ちつけてあるメイン・マストの真うしろには、また馬の蹄鉄が打ちつけてある。理由は説明して

黄道十二宮（部分）



いないが、昔から蹄鉄は縁起がよいとされ、願かけや魔除けのため、家の扉や船のマストに打ちつけたものである。

エイハブは金貨を見て言う、「この鋳造された太陽は血色のいい顔をしとるようだな。だが、見てみろ、そうだ、こいつは嵐の宮、昼夜平分点（九月二十三日、秋分の日）に入るぞ。ほんの六か月前は、一つ手前の白羊宮で昼夜平分点（三月二十一日、春分の日）から出たばかりなのに。嵐から嵐へか。それならそれでいいさ。苦しみの中で生まれたものなら、人間はまた苦しみの中に生き、苦しみの中に死ぬのが似合いというものだ」と。厳密に言うと、太陽はその中心が獅子宮と処女宮の境界時点にあるのであって、その時点が指しているのは、上掲図[16]で見るように、八月二十二日と二十三日の境なのである。だが、エイハブの読みで重要なのは、そこの日付や、春分の日、秋分の日、六か月といったような絶対的時点や期間ではなく、太陽の右側に放つ光線の先端が嵐の宮に触れていること、以前に嵐の宮から抜け出たのはそう遠い過去ではないこと、およびいずれは苦しみの中に死滅するだろう予感である。故郷を出立したばかりのピークォド号には月の光が照らしていたのに、沖合に出たあとはバルキントンという男が嵐の中を懸命に操舵している場面があった。その気高い姿に心うたれた語り手は「風下の岸辺に打寄せられる不名誉を忍ぶよりも、むしろ荒涼たる無窮の中に消滅した方がましではないか、たとえ風下の方が安全の地だとしても」（第23章）と述懐していた。そして今またこれから、船は日本近海で羅針盤をも狂わせるほどの猛烈な颱風に遭遇する（第119-122、124章）さだめにある。しかも、『白鯨』の例にもれず、嵐とは必ずしも気象のことのみに限らない。物語のこのような構造から、まずピークォド号の悲劇的滅亡が予示されていると読めるのである。

再び金貨のところにもどる。一等航海士スターバックの解釈はさしあたり時間の問題に関係がないから省略して、今度はスタッブに注目しよう。このパイプ好きの二等航海士はマサチューセッツ暦[17]を持ち出してくると、十二宮の「奇妙

な印から意味を探り出してやろう」、「どこかに鍵（クルー）があるはずだ」、「さあ、年暦よ、始めるぞ」と言って、解読を始める。「まず初めは白羊宮で、別名牡羊か」（中略）、「そこへ磨羯宮、別名山羊が全力で突進してきて、俺たちゃ突き上げられて、まっさかさま」、「すると宝瓶宮、つまり水がめを運ぶやつが、ありったけの水をぶっかけて、俺たちを溺れさせる」、「最後は双魚宮だから、魚と一緒に俺たちゃ眠るって寸法だ」と。これが『白鯨』なる物語の顚末を概括予言した「プランテド・クルー」（伏線）でなくて、何であろうか。これに限らず『白鯨』は伏線に満ち満ちた作品なのである。

次は、マン島出身の老水夫に耳を傾けよう。老人はまずメイン・マストに金貨が打ちつけてあるところの真うしろに回り、そこに蹄鉄が打ちつけてあるのを確かめると、金貨の方にもどり、図案の謎解きをする。「白鯨が発見されるとすれば、そいつはお天道さまが十二宮のどこかの月に入ってる一日じゃろうて」、「はて、お天道さまはその時、どの宮に入ってるじゃろうかな」、「馬の蹄鉄のところじゃ。なぜかなれば、金貨の真うしろにゃ蹄鉄があるじゃないか」、「じゃあ、蹄鉄ってのは何じゃ」、「咆えて貪り食う、獅子じゃ」、「ああ、船よ、老いぼれの船よ！　お前のことを思うと、わしの年老いた頭はぐらぐらするわい」と。ここでもまた、エクアドル（原義「赤道」）金貨により、赤道付近で消滅するピークォド号の運命が別の読みで予示されているのである。老人が初め金貨の真うしろに回ったのはなぜかと言えば、前述のように、デザイン化された太陽が獅子宮の位置に重なっているため、後者のサイン（宮の印で、だいたいギリシア文字オメガの形）が覆われて見えないから、老人は金貨そのものを太陽に見立てて、その真うしろに打ちつけてある蹄鉄（だいたいオメガの形）によってサインを確認するという、実にシャレた仕組みになっているのである。厳密に言うと、図案の太陽は処女宮をも覆い隠しているのであるが、老人の読みでは――ということは、作者の読ませ方で

は、獅子宮をこそ重視したいのである。スタッブは老人の独り言を立聞きして、「こりゃまた別の（面からの）解釈だが、テキストはひとつだ」と言う。頭のおかしい黒人少年ピップでさえも、この金貨からエイハブ船長の悲劇的末路を読み取っている。

以上の解釈をふまえて黄道帯（部分）の前掲図を見ると、太陽が獅子宮にある時期は七月二十三日から八月二十二日までの一か月であるから、従って、「ピークォド号が沈没するのは一八四一年七月二十三日から八月二十二日までの一日である」（解4）と予言されているのに気がつく。これ以上しぼるのはむずかしい。巨大な鯨に矮小な尺度は似あわない（第102章）のかも知れぬ。思えば当初、航海の予定は三年だった。[18] ということは、出航して七、八か月で帰らぬ船となるわけである。ちなみに、H・ブルース・フランクリンは何ら根拠を示すことなしに、白鯨発見をクリスマス以後としている。[19] だが、その解釈を裏づける内的証拠は作品に見当たらない。

念のために、アレグザンダー・スターバック(!)の浩瀚な『米国捕鯨史』をみると、東部海岸を基地とする捕鯨船の出港から帰港に至る期間は、一年という短いものもかなりあるが、三年、四年、時には五年にわたる場合も記録されており、[20] イシュメイルが「三年、四年、五年の航海」（第35章）もあると言っているのは事実なのである。

イシュメイルは執筆時の現在を「一八五〇年十二月の十六日、午後一時をまわること十五分、十五秒」[21]（第85章）と、いやに細かいことを、だが、実に興味深いことを言っている。ところが、物語の冒頭では「もう何年前のことになるか――精確な年数など、どうでもよかろう」と述べている。例の韜晦趣味が言わせているのであろうが、先の立証によって、実は約十年前のことと理解することができる。いや、精確に言うと、「語り手のニュー・ベッドフォード到着は、執筆時の明示時点から十年と四日前のことである」（解5）と知れるのである。

注

(1) Leyda, Jay. *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville, 1819–1891*. Vol. 1. New York: Gordian Press, 1969. p. 109.

(2) 青木信仰『時と暦』、東京大学出版会、一九八二年。74—85ページ。
山崎昭・久保良雄『暦の科学』、講談社、一九八四年。94—100ページ。
なお参考までに、日本で一八四〇年といえば天保十一年に当たり、第十二代将軍家慶の時代である。この年、福澤諭吉は五歳だった。暦は一七九七年以来の寛政暦を使っていたが、二年後に最も完成された太陰太陽暦といわれる天保暦に移行する。後者は明治五年（一八七二）十二月三日に太陽暦を使い始めるまで行なわれた暦で、こんにち旧暦という時は普通これを指す。日本では七世紀初め推古天皇の頃より明治初頭まで一貫して太陰太陽暦を使用した。従って、厳密に言うと、これを陰暦と呼ぶのは誤りである。むしろ回教暦の方が陰暦に近い。

(3) 内務省地理局編纂『三正綜覧』、神田茂補正新訂、芸林舎、昭和四十六年（初版、明治十三年）。398ページ、「九月英吉利國始用新暦改旧暦三日為十四日於是歐洲用旧暦者惟魯西亜一國而已」。

(4) 同、416ページ。

(5) 田中西二郎訳（新潮社版）は別の日として訳出。厳密には原文通りでないが、あながち誤りと断定することもできない。

(6) Leyda, Vol. 1, p. 111.

(7) *Ibid.*, p. 111.

(8) *Ibid.*, p. 113.

(9) *Ibid.*, p. 113.

(10) Howard, Leon. *Herman Melville, A Biography*. Berkley and Los Angeles: University of California Press, paper, 1958 [1951]. p. 40.

(11) 山本晶「"Benito Cereno" の出典と構造」、『英文学研究』第49巻第1、日本英文学会、昭和四十七年。43—54ページ。

(12) 同「『白鯨』の一解釈」、『芸文研究』第25号分冊1、慶應義塾大学芸文学会、昭和四十三年。185—199ページ。

(13) Leyda, Vol. 1, pp. 16–17.

(14) Hayford, Harrison and Hershel Parker, eds. *Moby-Dick*. New York: W. W. Norton, 1967. p. xix.

(15) 具体的には次掲書の表紙写真を見よ。
Parker, Hershel and Harrison Hayford, eds. *Moby-Dick As Doubloon: Essays and Extracts (1851-1970)*. New York: W. W. Norton, 1970.

(16) 研究社『新英和大辞典』第五版（一九八〇）所載の挿絵（半分）を研究社の許可を得て使用した。
ただし、金貨に印刻された黄道帯は極めて簡略な図柄に過ぎず、一番下の記号のうち左右各二つしか見えない。なお、厳密に言うと、黄道十二宮と十二星座とは別もので、各宮と星座は少しずつ範囲がずれているものである。だが、メルヴィルはそこまでの区別立てはせず、ホロスコープの一般的概念に従っている。この問題に関しては、次掲書を参照。
永田久『暦と占いの科学』、新潮社、昭和五十七年。239—243ページ。

(17) 天文暦、運勢暦、農事暦を兼ねるカレンダー、乃至アルマナック。日本の神宮暦のたぐいで、むかし年暦と呼んでいたものに相当する。

(18) ピーレグ船長「三年先の今日は、このナンタケットで、あったかいホカホカの晩めしを作っておくからな」（第22章）。以下、随所に三年とある。

(19) Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1963. p. 80.

(20) Starbuck, Alexander. *History of American Whale Fishery*. Secaucus, N. J.: Castle Books, 1989. pp. 168-659.

(21) 英国版より一か月近くあとに発行された米国版では「一八五一年」としたため、発行日（一八五一年十一月十四日）より一か月余り先づけになってしまった。

《付記》 *Tempus fugit*.——百年の歳月は時の経過を意識させる。よって記念論文集のために「作品と暦法」のテーマを選んだ。

Yamamoto, Shoh. "Ishmael's Itinerary: A Calendar Followed in *Moby-Dick*." *The Geibun Kenkyu* (The Keio Society of Arts and Letters, Tokyo) 58 (1990), 97-113.

Summary

(1) The main part of Ishmael's voyage takes place in 1841, the *Pequod* putting to sea on Christmas Day in 1840, because he says it was ordained by God to fall between 1840 and 1842.

(2) The calendar for December 1840 is as follows:

Sun.	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.	Sat.
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

Ishmael arrives in New Bedford on Saturday, December 12, and goes to sea two weeks later on Friday, December 25. It is possible to account for every day of this two-week period by referring to the descriptions given in Chapters 2 to 22.

(3) His ship is ostensibly bound for the Pacific via Cape Horn as far as Chapter 51, in which Ishmael suddenly reveals her new course: from the Plate to the Cape of Good Hope. The map in the Norton Critical Edition, p. xix, appears to be in error since the ship's course skips the long detour. Finally, the *Pequod* appears to sink near the Caroline Islands, in an area ranging approximately from the equator to lat. 10° N. and from long. 140° to 160° E.

(4) The White Whale is presumably raised when the Sun is in the zodiacal sign of Leo, *i.e.*, between July 23 and August 22, 1841. The ship sinks, therefore, seven or eight months after sailing from Nantucket. Consequently, H. Bruce Franklin is not justified in saying that "The voiceless White Whale is not raised until after Christmas." (*The Wake of the Gods*, p. 80.)

(5) Ishmael arrives in New Bedford precisely ten years and four days before December 16, 1850, when he says he is writing Chapter 85.